HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	開拓農業に關する覺書
Author(s)	渡邊, 侃
Description	資料
Citation	北海道帝國大學法經會法經會論叢, 6, 132-148
Issue Date	1938-03
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/10656
Type	departmental bulletin paper
File Information	6_p132-148.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

開拓農業に關する覺書

渡邊侃

一、向坂逸郎氏に酬ゆ
二、山田武彦氏に酬ゆ
三、佐藤昌介先生の「北海道農業發展經過」
四、農業經營簿記統計の成績
五、北米大平原地帶の農業發展と荒廢
六、カナダ農業の發展と變動
七、農村更生協會の北海道調査報告

一、向坂逸郎氏に酬ゆ

最近府縣に住む人々が北海道農業に興味を持出したのは二つの理由による。一は北海道が自由の天地で企業的大經營の農業が發達して居ると思はるゝことである。此方面は所謂進歩派の人々の興味を持つもので、其の最近の例として向坂逸郎氏の一聯の論文乃至感想文がある。(「資本主義と農業」及び「北海道の農村」改造昭和十一年九月及十月「北海道農業瞥見記」北海タイムス昭和十一年九月)他は滿洲特に北滿の植民事業に關し、風土の似たる植民地なる北海道の經驗を知らうと云ふのである。同じく最近の例は農村更生協會の視察及座談會開催である。(同時報十二年九・十月)前者には批判が多く、後者には之が少い様であるから、私の感想なり反批判な

りが前者に向けられる。向坂氏は私の書いた「北海道及樺太農業の展望」(日本農業の展望)「札幌南部の火山地帯の農業散策」(北大農實雜誌「大地」昭和十年)を引用して居られる。私は其後「開拓者S君」と云ふのを書いて小農を尊重して置いた。(同上雜誌昭和十一年)北海道の所謂大農をもつと統計的に研究することは私に於てもまだ緒についただけである。

東京の友人が札幌に夜汽車で着いて、驛から宿へ行く間の街の暗さに驚いて「池袋の驛前ほども賑かでない」と言ふた。

北見の野付牛町と言へは薄荷で有名な町だが、アイヌ語で野の果と云ふ意味の名で、向坂君は「大きな眞直ぐな道がはるか畑の間に消えて居るのを見ると如何にもさういふ感じのする淋しい街である」と云ふた。

私は今札幌に住み、前に滿七年間野付牛町に住んで居た。東京には一週間と居たことはないが住んで見るのも悪くなからうと思つて居る。だん〳〵賑やかなところに住み替へる積りである。

尤も、暖地に住むと云ふことは、寒地で金を貯めたか、土地家作でも持つて賃料が上るか、乃至恩給でもついて居る人々のやることである。東京郊外とか小田原とか熱海とかには、さう云ふ人々が多く生活して居るさうである。

或は、社會全體の機構が、植民地や周緣地で搾り取つたものを、中央が消費する様に出來て居るので、何も個人的に寒地で生活するとか暖地で生活する丈の問題ではない。

「毎朝起きやうと決心してから起きる迄に半日もかゝると云ふ不在地主オブローモフは北方のものだ」と向坂氏は書いたが其自身矛盾である。第一不在地主とは現地に居ないものを云ふ。第二に、事實北海道には貴族は居ない。伊達だの菊亭だのと云ふ貴族の名が記憶にあるが今どこに居られるか知られない。德川だの松平だの蜂須賀だのいかめしい名の農場も歷史上のものとなりつゝある。

小農家の物的幸福と云ふ見地からすれば、地方在住の小地主の土地を耕作することは最も有難からぬことである。小作料は高く取立もきびしい。之に比べると不在地主の土地の方が小作料も低く耕作も自由である。更に官公有の土地を小作するのは最も條件が寛大であるからよいわけである。尤も好條件で監督が嚴重でない丈「又小作」と云ふことが行はれ地方在住小地主の土地を小作すると同樣になるのである。其れがない所では小作農家は幸福である。地主が封建領主の樣な社會的名譽を要求するならば小作人は頭を下げて實利をとればよい理である英國の如きは此の如き關係が支配して居るものであらう。英國は少くも形式上封建的色彩が強い國である。併し日本では其形式が好まれぬ。頭を下げたくない。小なりとも自主を要求する。斯くして借金を背負ふても自作農となるのである。又文明的機械を使ふ大農場の勞働者の方が生活條件はよいかも知れぬが、自主の經營者たることを欲するのである。（此點に就て昨年夏蘇格蘭で開かれた第四回萬國農業經濟學會で討論があつたが、英國側が大農場制の實利を主張したに對し米國側が小農場主義を主張して居た。米國側の云ふには其の農場は家族經營（ファミリーサイズ）の大さであつて而も其平均家族員は他國よりも少いと言ふのであつた。大機械を使ひ大面積を耕作することが此の意味の大小經營區分の基礎でない。）

此の自由を欲する心が人々を植民地へ送るものではなからうか。府縣農村で農民が窮乏して居るとせよ。それでもとに角喰ふては居るし周圍には親戚も居て安心である。氣候はよいし安定して居る。開拓の勞苦を考へて見よ。少くも最初は經濟の不安のみならず生命の危險さへ少くない。北海道では熊が出る。滿洲では匪賊が襲ふ。ブラジルでも猛獸・毒蛇・鰐も居る。マラリアの絶えざる脅威があり醫者は居ない。それを征服して平和な植民地を建設するのは容易なことではない。

もつとも植民地には或種の平和は得られる。

『ブラジルには數百數千アルケール（町歩）の大地主の傲奢な邸を取り卷いて二十軒三十軒の淳朴な農奴にも似

た農民がある。部落の百人百五十人は全部顔見知で而も他との交通が少い。法律のありや無しやにも無關心に、都は政權爭奪の革命が五年十年毎に起るのに知る人もなく、語るものもない。野飼の牛は夕方になると沼地からなきながら歸つて來るし鷄は裏のバナヽの下で眠る、關心事は珈琲の稔りと子供の生長丈である。桃源の物語りも似た悠々たる生活は昨日と今日との間に何の區別もなく昨年と一昨年との間に何の變化もない。

世界の事は愚か日本の事さへも年に一度か二度か風の便りに聞く、ばかりで言はゞ何一つ知らずに日の出から日沒まで汗だくになつて働く。

勞働が暢氣なのだ、暢氣に働いてゐれば食つて行ける、土地は肥沃だし。氣候は良いし、物價は安い！これでこそ地上の樂園である。日本と違つて働いても食へんと云ふことはない。』と云ふ。次に

『尤も珈琲園の勞働は日本の農業に劣らず苦しい、變化にも乏しい、事實のブラジルは大變な處だ。僻遠の農村はこの世から隔絶された別世界だ。隣りの部落まで近くて三里、遠ければ十里、そこにはラヂオ、新聞雜誌は愚か郵便の配達さへもない。百姓達は土間に自分で寢臺を作つて休む。働くと食ふと寢るより他にする事も無い所だ。』

本國は新聞等で外國から考へれば恐ろしい逆殺・爭鬪・掠奪のるつぼである。併し現實はやはり平和の鄕土である。

而かも斯く勞苦と不安を厭はず植民者が出かける所以は何であるか。私は開拓者精神と呼びたい。それは自由なる建設を試みるものであるが時としては拾撥な放浪性にも墮しやう。

近代國家組織の運動としての植民は植民地を作るかも知れぬが植民者を作らない。植民地の意義は廣汎である植民者は居なくて結構植民地は出來るのである。移民しなくても資本を移し制度を移し乃至は甚だ漠然たる文化を移してもよいのである。否移すことは取ることなのである。

話が甚しく脫線した。要は北海道が如何なる農業を發展させたかと云ふことであつた。家族的勞作的小經營を發展させたと云ふことを云へば足る。それ以上の傭人企業並資本的大經營は比較的小數又は過發的であつた。尤も私は小數な傭人企業並資本的大經營の指導的立場を否定するものではない。

向坂氏は「資本主義と農業」の末尾に斯う書いて居る。

『(近代的企業家の)……知識と……理想と……生活とが農村に一般化するには日本農業はすでに日本全體の餘りに末世的な事情の中にまきこまれるゐる。この事實は社會に大きな變化のない限りどうにもならないものであらう。北海道の各地で近代的農場と近代的科學者の研究とを眺めていつも一抹の淋しさが殘つた。農業に於ける科學と合理性と發展力と日本農業の社會的形態での矛盾である。』

私共は最近M農場を訪ねて、あの末句は不可解だと告げられた。其の意味を推測するとこうである。折角先代から當主に渉つての努力をなし、また後繼者を丁抹に送つてまで、此事業を完成させんとし、北海道農業に貢獻すべく努力し、最近の不作不景氣を乘越えて來た、努力を買つて貰ひたい。それは勞苦多きものであるが、經濟上成立たぬものではない。また總ての經營が自分の經營の樣になつてくれとは願はない。それを社會的大變化をさせてまでどうしやうと云ふのだらう。そんな必要はないと言ふのである。

又近代科學者の研究の淋しさとは何であらう。最近に、產業組合聯合會側が內部組織の官僚分子を排斥するか農會畜產組合及官廳の指導以上に自からの指導體系を立てるとか云ふ風潮がないでない。自由なる人々は他の指導を受けやうと思はない。少くも表面上排斥する。此意味で自由企業家は組合を排斥し、組合は官廳を排斥するかも知れぬ。併し乍ら眞の貢獻はその排斥し合ふ各々がなし得るのであつて、眞の貢獻は表面排斥しても裏面には受入れらるゝことに歸着する。それまでは淋しいことも忍ばねばならない。徒らに社會の大きな變化を望むべきでない。

農業の科學的研究をなし合理的なるものを實現するとしても、所謂合理的なるものにも種々ある。例へば高價なる生産物のみを廣く繼續的に收穫する樣に經營することは一時の經濟目的から云へば合理的の樣だが、各種生産物を取整へ輪作することは永年に涉る經營の繼續にとつては反つて合理的である。或人が私に告げて云つた。『君達は輪作々々云ふが、有利な作物を連作出來る樣にするのが研究の目的ではないか』と。だが出來る程度と少くも現在或程度迄しか出來ぬことを知るのが農學研究の目的であつた。

向坂氏自身次の如く結論した。

『大經營が合理的である限りどん〳〵助長するといふ方策は過剩人口をこの上になほ作ることであり都市工業は之を收容する力がない。これは社會不安を激成するものであつて爲政者のなし得るところでない。今日のまゝで資本主義的商品生産にヨリよく適應する方法が爲政者に殘された唯一の方法であらう。』『各種の協同組合は小經營に大經營の技術的、商業的好條件を與ふる唯一の方法である。』と。

向坂氏に此以上どれだけの建設的目錄があるかは知らない。私共は此範圍の努力をすれば足るものである。

二、山田武彥君に酬ゆ

北海道帝國大學新聞（第一八二號昭和十二年六月八日）に山田武彥君が「滿洲と北海道の場合」なる文を寄せられ本學を鞭撻せられた。「眞の農民樂土たる北海道を生み出し開拓の先人の勞に値する自由の天地を彌が上にも興隆せしめるべき一大槓杆の役は北海道大學こそ之を擔ふべきであらう」とせらるゝのである。其意味は、一方北海道農業が期待せられし如く發達せず爲めに一旦府縣より北海道に移住せしものが再び海外に移住しやうとするのは北海道が農民に對し永住の樂土たり得ない自然的制限があり、又は得させない政策上の誤があるからであるとするものであり、他方「北海道で尊い經驗を經て來た移住者第二世の渡滿によつて其經驗が更に貴重な開花を

なし結果すべきことを期待して已まない」と云ふ期待でもある。此の具體的表現は「打續く冷害に打ち叩かれ水田を畑に還元し……畑の馬鈴薯を主とする根菜作物で漸く食繋ぐ有様である」と云ふ自然的方面と「農民が生産物を自給し得ないで專ら販賣の爲めに勞働する場合、國家がいくら補助しても其農民の其地に於ける成績は擧がるものではない」と云ふ經濟乃至政策的欠陷を指摘せらるゝのである。

私は北海道農民が食ふや喰はずに居て適當な樂に暮せる乃至開拓し甲斐のある移住地があるならば、そこに行かうと思ふて居るものも多いことを否定するものでない。最近の不景氣と不作に叩きのめされたことも否定しない。併し乍ら開墾當初無肥料で病蟲害もなく大した牧穫の擧がつた時代を農民は忘れて居ない。更に歐洲大戰末期から戰後に續いた景氣と良氣候の際の、制止し切れぬ北海道を目指す移住の潮流と、全道に涉る水田開發の趨勢を、何人か敢然制止したか。（尤も札幌農學校の傳統は米國流の畑大農經營と畜産を重んずるもので稻作危險論と麥食論であつたかとも思はれるが、其畜産の大先輩たる橋本左五郎博士に、府縣の稻苗を北海道に輸送して冷害を避ける考案のあつたこと、それを最近實行しかけたものがあつたこと、尤も病蟲害移入の危險を恐れて止める樣に勸告されて居ることなど、思ひ合はせると興味がある。歐米人が其の祖先を放牧畜産の民族に持つに對し本邦人が米作と水產で生きて來たとを思ひ合はせると、本邦人が海外に移住した場合にも米を作りたいと願ふのも無理はないのである。宗像（ムネカタ）と云ふ日本一の村長の實歷談を農村更生協會で聽いた記事には米を喰へる百姓になりたいと云ふのが若い內の最大の願であつたと云ふ。）

北海道でも根室・釧路の地方は本來の自然條件から見れば粗放な畜産が適する地方である。然るに好景氣と好天氣の結果、集約小經營の移住者を入れた。それが最近の不景氣と不良氣候に遇つて非常に困窮したのは是非もない。之れは一戶當面積を增加し牧草を輪作に入れ乳牛を飼ふ方向轉換によつて救はれて來た。尤も乳牛に疫病的のものが起り、支那事變では馬の需要が多くなり、もつと粗放な牧馬經營を要求される樣でもある。

政策の目的は斯かる景氣不景氣、良氣候不良氣候等の變化する影響を緩和する様に働かねばならぬであらう。併し乍ら大勢の波を飜すのは容易ではない。之を押へることが出來る様に一時は見えても不自然なものは激しい反動に襲はれるだらう。萬事さうであらう。植民と雖も其の例にもれない。

フレデリツキ大王以來、東北獨逸の荒野に內國植民を行ふことは獨逸の國策であつた。而も此地方は大農場の地であつて、小農民は驅逐せらるゝのである。內國植民の目的は、大農場に勞働者を供給し、中堅農民を入れて侵入する低級なスラブ民族を防ぐと云ふのであつた。それが思ひ通り出來ないことは統計が示して居る。

北海道に於て、大多數の農民が生活を續けて居ることは疑ひがない。併し其れ以上の多數農民を望んでも限度があらう。古い土地は開墾はしにくかつたが開墾後はよくなつて居る。新しい土地は開墾はしよい様でもあるが（土地が惡いため密林よりは草原が多い）それだけ開墾後は惡くなつて居る。此種の土地は國立公園として置けばよい。開墾は必要でない。私は阿寒國立公園を中心として、根・釧・北の地を步む每に感ずるのは、これは徒步や乘馬な自動車で步き廻る土地だと云ふことである。止まつて住むべき地と思はれぬのである。

北海道廳に關心を持つ人々は思ふ、北海道に移住者を招來しなくなれば、國費としての北海道拓殖費を貰ふ理由がなくなり、それがなくなれば北海道は火の消えた様になるであらうと。年々千戶に達するかどうかわからぬ移住者の故に北海道拓殖費を分捕るのであつたら國家に對する無責任である。之れは移民の爲めではない國費支出の形式の問題である。府縣では內務省・農林省が直轄の仕事（土木・森林・耕地整理等）をして居る、北海道はその仕事を內務省所管北海道拓殖費でやつて居る、と云ふ差異なのだ。今や、東北振興費だの、沖繩振興費だのが支出されねばならぬ様になつた。北陸・山陰・四國・九州振興費が將來出されぬでもなからう。中央は地方に適當の仕事を委任し、府縣の如き小單位は合同せられねばならぬことを示すに過ぎない。

斯かる農業地帶に對し商工業地帶たる中央から補助を出すことは、食料を供給し、更に新しい人間の給源たる

からである。北海道が商工業的に充分發達して居るとは思はれぬ。唯農業が此の程度に發達し過剩人口も出るとなれば、工業は增加してよい理である。根室とか釧路とか室蘭とか函館とか、石炭は近處にあり、工業を興し得る樣な土地で、而も發達しないのは、濃霧で不愉快であり、農業背後地を有せぬ故であらうが、將來はもつと伸びるであらう。（現在では農業中心地たる札幌・旭川・帶廣等が發展の途上にある）

拓殖實習場の或物は國立公園の中にある。他も同樣の還況裏にある。國立公園の目的は國民の訓練（デサイプリンレクリエーション）・蘇生（クリエーション）發生の場所たるにある。北海道全體も亦斯かる色彩を帶びる。そこの中に釀し出された力は動的（ダイナミック）である。北海道で篤農と呼ばれる人々の內、最初の土着地で成功したのはむしろ少く、第二次の（道內だが）移住地で成功せるものが多いことの如きは此好例である。

友部では團體訓練は受けるかも知れぬが、個人の自由創造は許されぬであらう。植民地は最初は集團が必要かも知れぬが眞の土着は散居でなければならぬ。

哈爾賓高等國民學校のI氏は滿洲移民は結局北海道開發を見倣ふのだと云ふた。其わりにすれば氣をつけて見て行く機會は與へられては居らぬ。それに比すると九大のK教授の如きは隨分よく見て行かれた。北海道から送られたのは僅かに亞麻會社とか甜菜會社とかの人々に過ぎない。

尤も滿拓のS君の如き北海道農場經驗者も居ないではないが數は少い。山田君の如き有力なるは疑ない。

北海道帝國大學の使命に就ては今更述べる必要もなからう。滿洲移民論、滿洲農政論は澤山出て居るが、何も經驗もない人々、研究も急慥への人々によつてゞある。經驗者、研究者の結論が、役に立つたとせらるゝには遙かに遠いのである。

三、佐藤昌介先生の「北海道農業の發展經過」

昭和十二年六月八日北海道廳及北海道農會主催の農道講習會末尾を飾る北海道開拓功勞者慰靈祭があり又講演會があつた。其講演の內北海道農會長たる佐藤先生の「北海道農業の發展經過」と云ふのは敎訓せらるゝこと大であつたから其大要を揭げて見やう。(其の最初の先生の經驗談的部分が北海道農會報四三九號昭和十二年七月分に「北海道農業の變遷に就て」として載つて居る)

先生は北海道農業の發展經過を三段階を別かつ。開拓時代、米作時代、有畜混合(混同)時代。開墾時代は屯田、士族團體、大名其他地主の率ゆる農場等にて營まれた。外國農業の影響(特に米國人が多いが外に獨逸人・丁抹人等も少しはある)も受けた。其頃は大森林を伐採燒却する時代で、氣候も霧や霜が多かつた。農事には見るべきものが少かつた。僅かに新墾地に適する小麥・大麥・菜種等が作られたに過ぎない。開拓が進み氣候がよくなつたり、作物の品種改良、耕種法の改善があつた。特に水稻に於て赤毛種は先づ適種と認められ、次いで此內から坊主種を更に坊主二、五、六號等を選出した如き品種改良があり、直播の樣な耕種法の改善、土功組合の樣な灌漑共同施設によつて、米作が發達した。此の時代を米作時代とされる。併し米作も過度に普及され、冷濕に被害される樣になり、冷濕でも出來る飼料作物で牛を飼ふことを加へた有畜混合(混同)農業が進んで來たとせらるゝのである。

私が考ふるには、佐藤先生が米作農業とされたのは、單作連作的經營の一例としてであつて北海道には其の外燕麥・馬鈴薯の連作經營があるので、燕麥は泥炭地で、馬鈴薯は鑛質酸性土壤地で他作物のよく出來ぬ場合が多く之を單作連作經營するのである。又豆類は十勝で、各種を選擇配當してではあるが豆類としての連作が行はれる。北見(網走支廳管內)では小麥・甜菜などの連作經營もあつたし薄荷・除蟲菊の如きは多年生作物で連作に似たものである。

單作連作（モノクルツーア）經營は其土地に適した最有利の作物のみ穫るのであるから、最も有利の様である。併し乍ら土地の生産力（地力）は單作連作によつて衰えるものであることは人も知る。之が行はれるのは原始的に蓄積されたる地力があるからであり、又比較的それに適する作物があるからであるが、やはり地力の衰えることは否定出來ない。自然或は多少加工せられたる草地に放牧する畜産もやはり單作連作經營に似たるものであらう。

單純な經營は技術經營の研究を集中的にすることが出來るから、民間だけで長足の進歩をなして居る様である又それだけ人を傭ふてやる大經營の如きも行はれる。然し漸次模倣するものが出て來れば生産過剰となり利益を減殺するを免れぬ。

水田稻作では全國的に需要が大であるから過剰は恐るべきでないが、而も氣候のよい年は全國的に豐作で價格が低く、其の悪い年は北海道はひどくわるく、而も全國的にはそれ程でなく價格も非常に騰貴する程でもないから打撃がひどく來る。畑作は作物種類の轉換が容易で、而も需要の少いものが多いから、生産過剰を來し易いのである。單作牧草栽培・放牧は地力を損することが少いが生産力が低い。斯くして一時單作連作大經營が行はれても、遠からずに、沒落し、漂泊浮沈消長が大である。

故に、混合經營は不利だけれども永續的ではあるので、不景氣、不作であればある丈け奬勵もせられ、實行もせらるゝものである。此の意味に於て佐藤男爵の言はれるところは正確と云はねばならない。

北米合衆國農業發達史上最初は自給農場（サブシステンスファーム）が多く、次いで大企業農場（ビッグビジネスファーム）が發展し、次いで職業的・科學的經營農場（プロフェッショナルファーム）が發達したとするものがある。（ジョセフ・シェーフアー・米國農業社會史）比較して類似の點を認め得るのである。

四、農業經營簿記統計事業の成績

翌六月九日は帝國農會主催の全國農業經營研究會が北海道農會で行はれた。本學よりは中島教授・前川十郎助

教授及小生が臨席し、農業經濟學科生他學生の傍聽せるもあつた。

此研究會の中心をなせるは北海道農會の若林幹事・小森技師等が熱心に指導せる農家及其團體（特に農事實行組合）の簿記普及實行の展示（デモンストレーション）であつた。全村・全部落を擧げての簿記實行、十年にも渉る繼續簿記農家等確かに指導意志の立派な實現の好例と云ふべきである。

府縣指導者は之に對して、北海道農業經營は資本主義的で、企業的農家が居るから斯く出來るのだと云ふ樣であり、府縣では地主の勢が强く、農民は奴隷的であり、簿記普及にしても其實行難を嘆いて居る樣にも見えた。併し愛知縣とか福岡縣とか、其方面の先進であり確信ある處もあるので、之は意志と熱によつて始めて出來る仕事と考ふべきであらう。

今數箇の例を揭げて農業經營簿記統計事業の成績を說明しやう。

此結果で見ると、一種作物又は一種畜產は昭和五年以前が指數高く五六七八九十年の六ケ年は下り、漸く十一年に至つて恢復を見せて居る。然るに混合經營形態では、漸次高上を見せて居るのは、乳牛の數を增し、能力を改善し、地力も恢復して來て居ることが原因と思はれる。即ち、之によつて經營が高上させ得るのである。（田・畑の規模を減ぜずして乳牛を加へ得ること）

A　各種農業經營の收入の年次變動

別	石狩江別	寄名鹽天	川西勝十	端見北野	山永狩石	方　地
經營種類	乳牛	薯作鈴麥燕馬乳牛	豆作	稻作	稻作	
田	1町9反	2反	—	7町5反	3町09	
畑	5町8反	8町9反	18町—40町	3町5反	—	
總收入平均	2,730.40	3,875.53	3,681.65	3,396.00	2,497.50	
農業收入昭和11年を100とする指數						
昭和 2年	—	61	77	—	—	
〃 3年	—	65	105	—	73	
〃 4年	—	66	108	—	92	
〃 5年	—	70	117	98	60	
〃 6年	—	61	104	51	53	
〃 7年	109	69	93	45	43	
〃 8年	116	81	83	117	57	
〃 9年	105	78	89	64	68	
〃 10年	101	75	89	51	74	
〃 11年	100	100	100	100	100	

B　經營群（部落）の個別比較

村落又は部落内の農業經營が如何なる程度にて差別があるかは村落・部落の運用上重要なる問題である。思ふに、平等に小さい自作農家から成立せる部落の如きは結束が容易であらう。差別が大であり大經營の數戸が存在する様のときには、結束は困難と云ふことがあらう。次の例（渡島柏木部落）の如きは十七戸から成つて居るが平等に稍少なる經營の大多數と、稍大なる二戸から成つて居る様である。農家所得（總收入・經營費）より農家生計費を差引いて餘剩が相當にあつて經營は改善せられて居る。

農家戸數分布

農家所得額						
年次 / 所得額	昭和7年	昭和8年	昭和9年	昭和10年	昭和11年	平均
500以下	7	1	6	3	3	4
500-1,000	6	11	7	8	9	8
1,000-1,500	2	2	3	3	2	2
1,500-2,000	1	2	—	—	—	1
2,000-2,500	1	—	—	1	—	1
2,500-3,000	—	—	1	2	1	1
3,000以上	—	1	—	—	2	1
平均	781.22	1,046.41	761.50	1,053.37	1,225.01	973.51
指數	100	134	97	135	157	

農家餘剩額						
年次 / 餘剩額	昭和7年	昭和8年	昭和9年	昭和10年	昭和11年	平均
0以下(-)	1	—	2	—	—	—
250以下	8	2	9	8	4	6
500以下	4	10	5	5	10	9
1,000以下	4	4	—	1	—	1
1,000以上	—	1	1	3	3	2
平均	294.39	592.35	216.00	478.07	570.97	434.36
指數	100	201	73	162	201	

五、北米大平原地帶の農業發展と荒廢

The future of the great plains, U.S.A. Congres Report. 1937

一八六〇年以前には大平原地帶（グレートプレーンエリア）は印甸人（インヂアン）と野牛（バファロー）の住處であつた。野牛は良い草生を追ふて遠く移動し印甸人

も之を逐ふ生活であつたから土地恢復は比較的容易であつた。故に草原が維持されたのである。

一八六〇年に鐵道がカンサス州を通じ、之に便宜を得てテキサス州から放牧牛が大平原に入つた。其の目的は最初は地方需要だけであつたが後には東部に送る企業となつた。一八八〇年には之が歐洲資本を背景とした大企業となつた。家畜數は激増し草生が衰へた。一八八六、八七年の嚴冬、一八八六、七五と打續いた旱魃で大經營は成立たなくなつた。併し耕作が進み、交通の便宜が增し、收穫物の價格も上り、耕作經營を刺激した。以前放牧時代には土地所有なしに經營されたが、耕作は自由土地所有の誘惑を導き、投機の勢さへ作られた。

一九一〇—一七年は雨量の多い周期に當つて小麥の收穫がよく、次いで歐洲大戰の價格暴騰が來たのである。普通は一ブシュル六五—八五仙の小麥が二弗にも騰つたのである。「小麥は戰爭を勝たせる」と煽り立てたのである。

耕作方法として一九一〇年頃から乾燥農法が始まつた。小麥品種の改良が進んだ。トラクターとコンバインが大いに用ひられ始めた。大面積の粗放な耕作が可能となつたのである。

併して之等の結果は此濕度の低い土地に於ける過度の放牧、過度の耕作による土地の荒廢となつたのである。

六、加奈陀大農業の發展と變遷

Murchie: Agricultural progress on the prairie
(Canadian frontier of Settlement, Vol. V.) 1936

カナダの平原地方の移住は一八一二年に始まると云ふてよい。現在ウイニペツグ市のある少し北のレツドリバー谷にセルカーク卿が植民者を入れたのである。併し之れは農業には關係の薄いものであつた。爾後半世紀も農業の成否は疑問であつたのだ。毛皮會社は開發を拒み、交通も亦甚だ不便であつた。蝗害や霜害があり、政治問題も起つた。

最初農業が始まつたのは川沿の土地であつたが、南露ゲルマン教派のメノナイトが、一八七五年に高原地の農業適地なることを說明するに至つて、其開發が始まつた。一八八五年加奈太太平洋鐵道が通じ植民と農業が大いに盛んになつた。一八八一―一八九一―一九一一の各十年に耕地は五倍した。一九二一年には二倍となり四千万エーカー（一千六百万町）に達した。

最初の植民者にとつて土地は「木（ウッド）・草（ヘー）・水（ウオーター）」を備へて居ることを必要としたが後には「犁耕し得る（レデーフオアプラウ）」が必要であつた。

作物としては小麥が首位にあり、其不適地にまで耕作が擴げられた。加ふるに歐洲大戰の高價時代、機械農業時代が來り、大經營が盛んとなつた。其の反動が來る程盛になつたのである。果然一九二〇―二一年には多數農場は破產した。

にも拘らず一部の開發はやはり進み、再び、一九二九―三〇年の大恐慌に遇つたのである。一九三一―三二年は旱魃に苦しめられた。それでもやはり擴張の勢にあると云ふ、誠に新開の勢は停止し難きものである。

年次	穀バイ刈コンの販賣數	馬匹に引かせる太平洋奈加トラクターの販賣數
1919年	—	8,844
1920年	—	12,279
1921年	—	3,428
1922年	—	4,222
1923年	—	4,166
1924年	—	2,112
1925年	—	4,053
1926年	176	6,513
1927年	598	10,026
1928年	3,657	17,143
1929年	3,500	14,557
1930年	1,614	9,108
1931年	179	828
計	9,724	95,279

十万のトラクター購入數は北米大陸にて千万の馬及騾を解放し、三千万エーカーの耕地と外に相當の草地を家畜用より販賣作物に變じた。（ベーカー）

然れども精細なる研究の結果は、

一、馬を用ふる方が動力の適度を得やすきこと

二、トラクターは其能力の五〇％も使用せられざる場合なし。特に大形のものに於て然りとす

三、而もトラクターは最大限勞働を考慮し大形を備へざるべからず

經濟關係より云ふも、トラクターと馬(騾)との比較をなしたるものを見るに、不景氣の際はトラクター價格機械油、ガソリン等の價格は割合に下落せず、馬及飼料價格は下落するが故に、前者は損失多く後者は少くなる。

七、農村更生協會の「北海道調査報告」

最近、北海道廳により巨大な北海道史が刊行されたり、北海道農會の若林技師によつて北海道開拓農業の功勞者の事蹟が顯明される等で、北海道研究が完成され様とするとき、此の報告が出たのは興味がある。目的は滿洲移民の參考にしやうと云ふのであるが、それだけでなく意義あるものである。大體、開拓農事の先驅者の經驗上の談話を中心にして居るが、北海道農事試驗場長安孫子技師の如き指導に携はる人々の將來への示唆も受けられる。

私の受けた示唆は第一に適地適經營と云ふことである。濃霧地帶で火山灰地と云ふ最惡の條件の土地で、釧路國厚岸郡太田村の屯田兵村は、馬鈴薯しか喰ふものが出來ず、それすら疫病が出て全滅に瀕したとき、幸に「疫知らず」或は「タカマクラ」と云ふ品種の發見によつてやつと生産が維持され、放牧と燒炭によつて收入を得て、現在では惡くない生計を立てゝ居ると云ふ話などは、私には初ではないが、興味ある話である。之を以て最粗放な經營で最惡の農業條件に適應したものとすると、之より集約度を進めれば、同様濃霧氣候と火山灰土壤であるが地位がよい爲めに飼料作物を主作する膽振國山越郡八雲町の酪農經營の如きがある。次ぎに北見國常呂郡野付牛町や、紋別郡上湧別町の如き工藝作物中心の畑作地帶とか、石狩國上川郡永山村、空知郡栗澤村の水田經營地帶がある。地位氣候がよいが地味があまりよくない地帶に再び乳牛を主とする經營が出る。

此様な集約度の適度と云ふものが、稍粗放である方に安全性があるが、人口食料政策移民政策と云ふものが強調されるたけ無理がかゝると云はねばならない。

第二の示唆は農業の永續性はどこまでも勞作主義を保つことによつて得られることである。概して金を借りてやつた仕事、儲けやうとしてやつた仕事、實際儲かつた仕事等が失敗に歸し、苦んで開拓し、出來る丈け儉約してやつて來たものだけが殘つて居るのであつて、このことは解り切つたこと乍ら今更の如く感銘させられる。

北海道開拓農業の社會組織が、或は封建藩制、或は軍隊制(屯田)、或は公共又は資本的地主と小作の制度(農場制)、或は原住地域團體制に基づいた場合、特に其指導者に有力なものがあつた場合最も有効に建設作用を受けたわけである。(最も力弱かつたものに宗教道德團體制がある)併し乍ら之等の社會組織體制が開拓時代を了つて後の政治體制に適應出來たかを考へると、否と云はざるを得ない。或は開拓時代にすらどれだけ有力であつたかも私には疑はれるのである。北海道の開拓は大部分は自由移住者によつて行はれたのである。上述の社會組織體制は破壞されて了つたと云ふて支障ないのであらう。即ち所謂村の組織なるものが社會組織の內在的性質としてはめ認られなかつたのだから政治經濟組織に壓倒されたと考ふべきである。而して之が自然の經過でもある。

滿洲の移住地のことなど考へると半軍隊制、半公共制の移民村制が必要とは思はれるが、いつまでもそれでは發展の餘地は少い。滿鮮人に伍しても其社會組織の中にはいりこんで發展するでなければ將來好望とは考へらない。其意味に於て「經濟生活に於ては明治維新以來の七十年は漸次そ(共同の紐帶)の解體化のうちに動いて來た」「生きもの相手の農業は一面極めて個性的であり、家族は個別化の本據でもある」と云ふ方面を忘れることが出來ない。其意味に於て本書の結論も讀まれねばならない。

(昭和一三・二・一〇)